

西郷隆盛

芥川龍之介

青空文庫

これは自分より二三年前に、大学の史学科を卒業した本間さんほんまの話である。本間さんが維新史に関する、二三興味ある論文の著者だと云う事は、知っている人も多いであろう。僕は昨年こぞの冬鎌倉へ転居する、丁度一週間ばかり前に、本間さんと一しよに飯を食いに行つて、偶然この話を聞いた。

それがどう云うものか、この頃になつても、僕の頭を離れない。そこで僕は今、この話を書く事によつて、新小説の編輯者へんしゅうしゃに対する僕の寄稿きこうの責せめを完まつしようと思つ。もつとも後のちになつて聞けば、これは「本間さんの西郷隆盛さいこうたかもり」と云つて、友人間には有名な話の一つだそうである。して見ればこの話もある社会には存外もう知られている事かも知れない。

本間さんはこの話をした時に、「真偽の判断は聞く人の自由です」と云つた。本間さんさえ主張しないものを、僕は勿論主張する必要がない。まして読者はただ、古い新聞の記事ぎじを読むように、漫然まぜんと行を追つて、読み下してさえくれれば、よいのである。

かれこれ七八年も前にもなるうか。丁度三月の下旬で、もうそろそろ清水きよみづの一重桜ひとえざくらが咲きそうな——と云つても、まだ霰みぞれまじりの雨がふる、ある寒さのきびしい夜の事である。当時大学の学生だった本間さんは、午後九時何分かに京都を発した急行の上り列車の食堂で、白葡萄酒しろぶどうしゅのコップを前にしながら、ぼんやりM・C・Cの煙をふかしていた。さつき米まいばら原を通り越したから、もう岐阜県の境さかいに近づいているのに相違ない。硝子窓ガラスから外を見ると、どこも一面にまつ暗である。時々小さい火の光りが流れるように通りすぎることが、それも遠くの家いへの明りだか、汽車の煙突から出る火花だか判然しない。その中でただ、窓をたたたく、凍りかかった雨の音が、騒々しい車輪の音に単調な響を交している。

本間さんは、一週間ばかり前から春期休暇を利用して、維新前後の史料を研究かたがた、独りで京都へ遊びに来た。が、来て見ると、調べたい事もふえて来れば、行つて見たい所もいろいろある。そこで何かと忙せわしい思をしている中に、いつか休暇も残のこりすくなくなった。新学期の講義の始まるのにも、もうあまり時間はない。そう思うと、いくら都踊りや保津川下りに未練があつても、便々と東山ひがしやまを眺めて、日を暮しているのは、気が咎とがめる。本間さんはとうとう思い切つて、雨が降るのに荷拵にぎしらえが出来ると、俵屋たわらやの玄関か

ら俾^{くるま}を駆つて、制服制帽の甲斐甲斐しい姿を、七条の停車場へ運ばせる事にした。

ところが乗つて見ると、二等列車の中は身動きも出来ないほどこんでいる。ポオイが心配してくれたので、やっと腰を下す空地^{くうち}が見つかったが、それではどうも眠れそうもない。そうかと云つて寝台は、勿論皆売切れている。本間さんはしばらく、腰の広さ十圍^いに余る酒臭い陸軍将校と、眠りながら歯ぎしりをするとどこかの令夫人との間にはさまつて、出来るだけ肩をすぼめながら、青年らしい、とりとめのない空想に耽^{ふけ}つていた。が、その中に追々空想も種切れになつてしまう。それから強隣の圧迫も、次第に甚しくなつて来るらしい。そこで本間さんは已^やむを得ず、立つた後^{あと}の空地へ制帽を置いて、一つ前に連結してある食堂車の中へ避難した。

食堂車の中はがらんとして、客はたった一人しかいない。本間さんはそれから一番遠いテエブルへ行つて、白葡萄酒を一杯云いつけた。実は酒を飲みたい訳でも何でもない。ただ、眠くなるまでの時間さえ、つぶす事が出来ればよいのである。だから無愛想なウエエタアが琥珀^{こはく}のような酒の杯^{さかずき}を、彼の前へ置いて行つた後^{あと}でも、それにはちよいと唇を触れたばかりで、すぐにM・C・Cへ火をつけた。煙草の煙は小さな青い輪を重ねて、明い電燈の光の中へ、悠々とのぼつて行く。本間さんはテエブルの下に長々と足をのばしながら、

始めて楽に息がつけるような心もちになった。

が、体だけはくつろいでも、気分は妙に沈んでいる。何だかこうして坐っていると、硝子^{ラス}の外のくら暗が、急にこつちへはいって来そうな気がしないでもない。あるいは白いテエブル・クロオスの上に、行儀よく並んでいる皿やコップが、汽車の進行する方向へ、一時に迂り出しそうな心もちもする。それがはげしい雨の音と共に、次第に重苦しく心をおさえ始めた時、本間さんは物に脅^{おび}されたような眼をあげて、われ知らず食堂車の中を見まわした。鏡をはめこんだカップ・ボオド、動きながら燃えている幾つかの電燈、菜の花をさした硝子の花瓶、——そんな物が、いずれも耳に聞えない声を出して、ひしめいてでもいるように、慌しく眼にはいつて来る。が、それらのすべてよりも本間さんの注意を惹^ひいたものは、向うのテエブルに肘^{ひじ}をついて、ウイスキーらしい杯を嘗^なめている、たった一人の客であった。

客は斑^{はんぱく}白の老紳士で、血色のいい両頬には、聊^{いささ}か西洋人じみた疎^{まばら}な髯を貯えている。これはつんと尖った鼻の先へ、鉄^{てつ}縁^{ぶち}の鼻眼鏡をかけたので、殊にそう云う感じを深くさせた。着ているのは黒の背広であるが、遠方から一見した所でも、決して上等な洋服ではないらしい。——その老紳士が、本間さんと同時に眼をあげて、見るともなくこつちへ眼

をやった。本間さんは、その時、心の中で思わず「おや」と云うかすかな叫び声を発したのである。

それは何故かと云うと、本間さんにはその老紳士の顔が、どこかで一度見た事があるように思われた。もつとも実際の顔を見たのだから、写真で見たのだから、その辺ははっきりわからない。が、見た覚えは確かにある。そこで本間さんは、慌しく頭の中で知っている人の名前を点検した。

すると、まだその点検がすまない中に、老紳士はつと立上って、車の動揺に抵抗しながら、おおまた大股に本間さんの前へ歩みよった。そうしてそのテーブルの向うへ、むぞうさ無造作に腰を下すと、壮年のような大きな声を出して、「やあ失敬」と声をかけた。

本間さんは何だかわからないが、年長者の手前、意味のない微笑を浮かべながら、ちよつと一寸頭を下げた。鷹揚おうよう

「君は僕を知っていますか。なに知っていない？ 知っていなければ、いなくつてもよろしい。君は大学の学生でしょう。しかも文科大学だ。僕も君も似たような商売をしている人間です。事によると、同業組合の一人かも知れない。何です、君の専門は？」

「史学科です。」

「ははあ、史学。君もドクタア・ジョンソンに軽蔑される一人ですね。ジョンソン曰、歴史家は almanac-maker にすぎない。」

老紳士はこう云つて、頸くびを後うしろへ反そらせながら、大きな声を出して笑い出した。もう大分だいぶ酔よがまわつていたのであろう。本間さんは返事をしらずに、ただにやにやほほ笑みながら、その間に相手の身のまわりを注意深く観察した。老紳士は低い折襟せりに、黒いネクタイをして、所々すりきれたチョッキの胸むねに太い時計の銀ぎん鎖くさりを、物々しくぶらさげている。がこの服装のみすぼらしいのは、決して貧乏でそうしてゐるのではないらしい。その証拠しやうこには襟えりでもシャツの袖口そでぐちでも、皆新しい白い色を、つめたく肉の上へ硬こわばらしている。恐らく学者とか何とか云う階級けいけいに属する人なので、完まったく身なりなどには無頓着むとんじやうなのであろう。「オールマナック・メエカア。正にそれにちがいない。いや僕の考える所では、それさえ甚だ疑問しんぎんですね。しかしそんな事は、どうでもよろしい。それより君の特に研究しようとしてゐるのは、何ですか。」

「維新史です。」

「すると卒業論文の題目も、やはりその範囲内にある訳ですね。」

本間さんは何だか、口頭試験こうとうしけんでもうけているような心もちになった。この相手の口吻こうぶん

には、妙に人を追窮するような所があつて、それが結局自分を飛んでもない所へ陥れような予感が、この時ぼんやりながらしたからである。そこで本間さんは思い出したように、白葡萄酒の杯をとりあげながら、わざと簡単に「西^{せい}南^{なん}戦争を問題にするつもりです」と、こう答えた。

すると老紳士は、自分も急に口ざみしくなつたと見えて、体を半分^{うしろ}後の方へ^ね じまげると、怒鳴りつけるような声を出して、「おい、ウイスキーを一杯」と命令した。そうしてそれが来るのを待つまでもなく、本間さんの方へ向き直つて、鼻眼鏡の後に一種の嘲笑の色を浮かべながら、こんな事をしゃべり出した。

「西南戦争ですか。それは面白い。僕も叔父があの時賊軍に加わつて、討死をしたから、そんな興味で少しは事実の穿^{せん}鑿^{さく}をやつて見た事がある。君はどう云う史料に従つて、研究されるか、知らないが、あの戦争については随分誤伝が沢山あつて、しかもその誤伝がまた立派に正確な史料で通つています。だから余程史料の取捨^{つっし}を慎^{しん}まない、思いもよらない誤謬^{ごびう}を犯すような事になる。君も第一^{まず}に先、そこへ気をつけた方が好^いいでしよう。」

本間さんは向うの態度や口ぶりから推して、どうもこの忠告も感謝して然る可きものか、どうか判然しないような気がしたから、白葡萄酒を嘗^なめ嘗^なめ、「ええ」とか何とか、至極

曖昧あいまいな返事をした。が、老紳士は少しも、こっちの返事などには、注意しない。折からウエエタアが持つて来たウイスキーで、ちよいと喉のどを沾うるおすと、ポケットから瀬戸物のパイプを出して、それへ煙草をつめながら、

「もつとも気をつけても、あぶないかも知れない。こう申すと失礼のようだが、それほどあの戦争の史料には、怪しいものが、多いですね。」

「そうでしょうか。」

老紳士は黙つて頷きながら、燐寸まっちをすつてパイプに火をつけた。西洋人じみた顔が、下から赤い火に照らされると、濃い煙まぼらが疎まぼらな鬚まぼらをかすめて、埃エジプト及の匂をふんとさせる。本間さんはそれを見ると何故か急にこの老紳士が、小面こづら憎く感じ出した。酔っているのは勿論、承知している。が、いい加減な駄法螺だぼらを聞かせられて、それで黙つて恐れ入つては、制服の金釘きんボタンに対しても、面目が立たない。

「しかし私には、それほど特に警戒する必要があるとは思われませんが——あなたはどうか理由で、そうお考えなのですか。」

「理由？ 理由はないが、事実がある。僕はただ西南戦争の史料を一々綿密に調べて見た。そうしてその中から、多くの誤伝を発見した。それだけです。が、それだけでも、十分そ

う云われはしないですか。」

「それは勿論、そう云われます。では一つ、その御発見になった事実を伺いたいものですね。私なぞにも大いに参考になりそうですから。」

老紳士はパイプを銜くわえたまま、しばらく口を噤つぶんだ。そうして眼を硝子窓の外へやりながら、妙にちよいと顔をしかめた。その眼の前を横ぎつて、数人の旅客の佇たたずんでいる停車場が、くら暗と雨との中をうす明く飛びすぎる。本間さんは向うの気色けしきを窺かがいながら、腹の中でぎまを見ると眩くらきたくなつた。

「政治上の差障さしさわりさえなければ、僕も喜んで話しますが——万一秘密の洩れた事が、山や県公まがたこうにでも知れて見給え。それこそ僕一人の迷惑ではありませんからね。」

老紳士は考え考え、徐おもむろにこう云つた。それから鼻眼鏡の位置を変えて、本間さんの顔を探るような眼で眺めたが、そこに浮んでいる侮蔑ぶべつの表情が、早くもその眼に映つたのである。残っているウイスキーを勢いよく、ぐいと飲み干すと、急に鬚かだらけの顔を近づけて、本間さんの耳もとへ酒臭い口を寄せながら、ほとんど囁かみつきでもしそうな調子で、囁かいた。

「もし君が他言たごんしないと云う約束さえすれば、その中の一つくらいは洩もらしてあげましょ

う。」

今度は本間さんの方で顔をしかめた。こいつは氣違いかも知れないと云う氣が、その時咄嗟とつさに頭をかすめたからである。が、それと同時に、ここまで追窮して置きながら、見す見すその事実なるものを逸してしまふのが、惜しいような、心もちもした。そこへまた、これくらいな嚇おどしに乘せられて、尻込みするような自分ではないと云う、子供じみた負けぬ氣も、幾分かは働いたのであろう。本間さんは短くなつたM・C・Cを、灰皿の中へ抛ほうりこみながら、頸くびをまつすぐにのばして、はつきりとこう云つた。

「では他言しませんから、その事実と云うのを伺わせて下さい。」

「よろしい。」

老紳士は一しきり濃い煙をパイプからあげながら、小さな眼でじつと本間さんの顔を見た。今まで氣がつかずにいたが、これは氣違いの眼ではない。そうかと云つて、世間一般の平凡な眼とも違う。聡明な、それでいてやさしみのある、始終何かに微笑を送っているような、朗然ろうぜんとした眼である。本間さんは黙つて相手と向い合いながら、この眼と向うの言動との間にある、不思議な矛盾を感じずにはいられなかつた。が、勿論老紳士は少しもそんな事には氣がつかない。青い煙草の煙が、鼻眼鏡を繞めぐつて消えてしまふと、その煙

の行方を見送るように、静に眼を本間さんから離して、遠い空間へ漂せながら、頭を稍後へ反らせてほとんど独り呟くように、こんな途方もない事を云い出した。

「細かい事実の相違を挙げていては、際限がない。だから一番大きな誤伝を話しましょう。それは西郷隆盛が、城山の戦では死ななかつたと云う事です。」

これを聞くと本間さんは、急に笑いがこみ上げて来た。そこでその笑を紛せるために新しいM・C・Cへ火をつけながら、強いて真面目な声を出して、「そうですね」と調子を合せた。もうその先を尋きただすまでもない。あらゆる正確な史料が認めている西郷隆盛の城山戦死を、無造作に誤伝の中へ数えようとする——それだけで、この老人の所謂事実も、略正体が分っている。成程これは氣違いでも何でも無い。ただ、義経と鉄木真とを同一人にしたり、秀吉を御落胤にしたりする、無邪気な田舎翁の一人だったのである。こう思った本間さんは、可笑しさと腹立たしさと、それから一種の失望とを同時に心の中で感じながら、この上は出来るだけ早く、老人との問答を切り上げようと決心した。「しかもあの時、城山で死ななかつたばかりではない。西郷隆盛は今日までも生きています。」

老紳士はこう云つて、むしろ昂然と本間さんを一瞥した。本間さんがこれにも、「は

はあ」と云う気のない返事で応じた事は、勿論である。すると相手は、嘲るような微笑をちらりと唇しんとう頭に浮べながら、今度は静な口ぶりで、わざとらしく問いかけた。

「君は僕の云う事を信ぜられない。いや弁解しなくつても、信ぜられないと云う事はわかっている。しかし——しかしですね。何故君は西郷隆盛が、今日こんにちまで生きていると云う事を疑われるのですか。」

「あなたは御自分でも西南戦争に興味を御持ちになつて、事実の穿せん鑿さくをなすつたそうですが、それならこんな事は、恐らく私から申上げるまでもないでしょう。が、そう御尋ねになる以上は、私も知っているだけの事は、申上げたいと思います。」

本間さんは先方の悪く落着いた態度が忌いま々ましくなつたのと、それから一刀両断に早くこの喜劇の結末をつけたいので、大人気おとなげないと思ひながら、こう云う前置きをして置いて、口早やに城山戦死説を弁じ出した。僕はそれを今、詳しくここへ書く必要はない。ただ、本間さんの議論が、いつもの通り引証の正確な、いかにも論理の徹底している、決定的なものだつたと云う事を書きさえすれば、それでもう十分である。が、瀬戸物のパイプを銜くわえたまま、煙を吹き吹き、その議論に耳を傾けていた老紳士は、一向いっこう辟易へきえきしたらしい景色けしきを現さない。鉄縁の鼻眼鏡うしろの後には、不相あいかわらず変へ小さな眼が、柔らかな光をたたえ

ながら、アイロニカルな微笑を浮べている。その眼がまた、妙に本間さんの論鋒ろんぼうを鈍らせた。

「成程なるほど、ある仮定の上に立つて云えば、君の説は正しいでしょう。」

本間さんの議論が一段落を告げると、老人は悠然とこう云った。

「そうしてその仮定と云うのは、今君が挙げた加治木常樹城山籠城調査筆記とか、市来四郎日記とか云うものの記事を、間違のない事実だとする事です。だからそう云う史料は始めから否定している僕にとつては、折角せつかくの君の名論も、徹頭徹尾ノンセンスと云うよりほかはない。まあ待ち給え。それは君はそう云う史料の正確な事を、いろいろの方面から弁護する事が出来るでしょう。しかし僕はあらゆる弁護を超越した、確かな実証を持つている。君はそれを何だと思えますか。」

本間さんは、聊か煙いんに捲かれて、ちよいと返事に躊躇した。

「それは西郷隆盛が僕と一しよに、今この汽車に乗っていると云う事です。」

老紳士はほとんど厳肅に近い調子で、のしかかるように云い切った。日頃から物に騒がない本間さんが、流石さすがに愕然としたのはこの時である。が、理性は一度脅おびやかされても、このくらいな事でその権威を失墜しはしない。思わず、M・C・Cの手を口からはなした本間

さんは、またその煙をゆっくり吸いかえしながら、怪しいと云う眼つきをして、無言のまま、相手のつんと高い鼻のあたりを眺めた。

「こう云う事実には比べたら、君の史料の如きは何ですか。すべてが一片の故紙に過ぎなくなってしまうでしょう。西郷隆盛は城山で死ななかつた。その証拠には、今この上り急行列車の一等室に乗り合せている。このくらい確かな事実はありますまい。それとも、やはり君は生きている人間より、紙に書いた文字の方を信頼しますか。」

「さあ——生きていると云つても、私が見たのでなければ、信じられません。」

「見たのでなければ？」

老紳士は傲然ごうぜんとした調子で、本間さんの語を繰返した。そうして徐おもむろにパイプの灰をはたき出した。

「そうです。見たのでなければ。」

本間さんはまた勢いを盛返して、わざと冷かに前の疑問をつきつけた。が、老人にとっては、この疑問も、格別、重大な効果を与えなかつたらしい。彼はそれを聞くと依然として傲慢な態度を持しながら、故ことごとらに肩を聳そびかせて見せた。

「同じ汽車に乗っているのだから、君さえ見ようと云えば、今でも見られます。もつとも

南洲先生はもう眠てしまったかも知れないが、なにこの一つ前の一等室だから、無駄足をしてでも大した損ではない。」

老紳士はこう云うと、瀬戸物のパイプをポケットへしまいながら、眼で本間さんに「来給え」と云う合図あいずをして、大儀そうに立ち上った。こうなつては、本間さんもとにかく一しよに、立たざるを得ない。そこでM・C・Cを銜くわえたまま、両手をズボンのポケットに入れて、不承不承ふしようぶしように席を離れた。そうして蹠そうろう跟ろうたる老紳士の後うしろから、二列に並んでいるテーブルの間を、大股に戸口の方へ歩いて行つた。後あとにはただ、白葡萄酒のコップとウイスキーのコップとが、白いテーブル・クロオスの上へ、うすい半透明な影を落して、列車を襲いかかる雨の音の中に、寂しくその影をふるわせている。

それから十分ばかりたった後の事あとである。白葡萄酒のコップとウイスキーのコップとは、再び無愛想なウエエタアの手で、琥珀色こはくいろの液体がその中に充みされた。いや、そればかりではない。二つのコップを囲ほんでは、鼻眼鏡をかけた老紳士と、大学の制服を着た本間ほんまさ

んどが、また前のように腰を下している。その一つ向うのテエブルには、さつき二人と入れちがいにはいつて来た、着流しの肥った男と、芸者らしい女どが、これは海老のフライか何かを突ついででもいるらしい。滑かな上方弁の会話が、纏綿として進行する間に、かちやかちや云うフオオクの音が、しきりなく耳にはいつて来た。

が、幸い本間さんには、少しもそれが気にならない。何故かと云うと、本間さんの頭には、今見て来た驚くべき光景が、一ぱいになつて拡がっている。一等室の鶯茶がかつた腰掛と、同じ色の窓帷と、そうしてその間に居睡りをしている、山のような白頭の肥大漢と、——ああその堂々たる相貌に、南洲先生の風骨を認めたのは果して自分の見ちがいであつたらうか。あすこの電燈は、気のせいか、ここよりも明くない。が、あの特色のある眼もとや口もとは、側へ寄るまでもなくよく見えた。そうしてそれはどうしても、子供の時から見慣れている西郷隆盛の顔であつた。……

「どうですね。これでもまだ、君は城山戦死説を主張しますか。」

老紳士は赤くなつた顔に、晴々とした微笑を浮べて、本間さんの答を促した。

「……………」

本間さんは当惑した。自分はどちらを信ずればよいのであろう。万人に正確だと認めら

れている無数の史料か、あるいは今見て来た魁偉かゝいな老紳士か。前者を疑うのが自分の頭を疑うのなら、後者を疑うのは自分の眼を疑うのである。本間さんが当惑したのは、少しも偶然ではない。

「君は今現に、南洲先生を眼まのあたりに見ながら、しかも猶なほ史料を信じたがっている。」
老紳士はウイスキイの杯を取り上げながら、講義でもするような調子で語ことばを次いだ。

「しかし、一体君の信じたがっている史料とは何か、それからまず考えて見給え。城山戦死説はしばらく問題外にしても、およそ歴史上の判断を下すに足るほど、正確な史料などと云うものは、どこにだってありはしないです。誰でもある事実の記録をするには自然と自分でデイトエルの取捨選択をしながら、書いてゆく。これはしないつもりでも、事実としてするのだから仕方がない。と云う意味は、それだけもう客観的の事実から遠ざかると云う事です。そうでしょう。だから一見あて当あてになりそうで、実ははなはだ当あてにならない。ウオルタア・ラレエが一旦起した世界史の稿を廃した話などは、よくこの間かんの消息を語っている。あれは君も知っているでしょう。実際我々には目前の事さえわからない。」
本間さんは実を云うと、そんな事は少しも知らなかった。が、黙うちっている中に、老紳士の方で知っているものときめてしまったらしい。

「そこで城山戦死説だが、あの記録にしても、疑いを挟む余地は沢山ある。成程西郷隆盛が明治十年九月二十四日に、城山の戦で、死んだと云う事だけほどの史料も一致していきましょう。しかしそれはただ、西郷隆盛と信ぜられる人間が、死んだと云うのにすぎないのです。その人間が実際西郷隆盛かどうかは、自らまた問題が違つて来る。ましてその首や首のない屍体を発見した事実になると、さつき君が云つた通り、異説も決して少くない。そこも疑えば、疑える筈です。一方そう云う疑いがある所へ、君は今この汽車の中で西郷隆盛——と云いたくなければ、少くとも西郷隆盛に酷似している人間に遇つた。それでも君には史料なるものの方が信ぜられますか。」

「しかしですね。西郷隆盛の屍体は確かにあつたのでしよう。そうすると——」

「似ている人間は、天下にいくらもいます。右腕に古い刀創があるとか何とか云うのも一人に限つた事ではない。君は狄青が濃智高の屍を検した話を知っていますか。」

本間さんは今度は正直に知らないと白状した。実はさつきから、相手の妙な論理と、いろいろな事をよく知っているのに、悩まされて、追々この鼻眼鏡の前に一種の敬意に似たものを感じかかつていたのである。老紳士はこの間にポケットから、また例の瀬戸物のパイプを出して、ゆっくり埃及の煙をくゆらせながら、

「狄青が五十里を追うて、大理だいりに入った時、敵の屍体を見ると、中に金竜きんりゆうの衣いを着て
 いるものがある。衆は皆これを智高だと云ったが、狄青は独り聞かなかつた。『安んぞそ
 の詐いつわりにあらざるを知らんや。むしろ智高を失うとも、敢て朝廷を誣しいて功を貪むさぼらじ』こ
 れは道徳的に立派なばかりではない。真理に対する態度としても、望ましい語ことばでしょう。
 ところが遺憾ながら、西南戦争当時、官軍を指揮した諸將軍は、これほど周密しゆうみつな思慮
 を欠いていた。そこで歴史までも『かも知れぬ』を『である』に置き換えてしまったので
 す。」

愈いよいよどうにも口が出せなくなつた本間さんは、そこで苦しまぎれに、子供らしい最後の反は
 駁んぱくを試みた。

「しかし、そんなによく似ている人間がいるでしょうか。」

すると老紳士は、どう云う訳か、急に瀬戸物のパイプを口から離して、煙草の煙にむせ
 ながら、大きな声で笑い出した。その声があまり大きかつたせいか、向うのテエブルにい
 た芸者がわざわざふり返つて、怪訝けげんな顔をしながら、こつちを見た。が、老紳士は容易に、
 笑いやまない。片手に鼻眼鏡が落ちそうになるのをおさえながら、片手に火のついたパイ
 プを持つて、咽のどを鳴らし鳴らし、笑っている。本間さんは何だか訳がわからないので、白

葡萄酒の杯を前に置いたまま、茫然とただ、相手の顔を眺めていた。

「それはいます。」老人はしばらくしてから、やっと息をつきながら、こう云った。

「今君が向うで居眠りをしているのを見たでしょう。あの男なぞは、あんなによく西郷隆盛に似ているではないですか。」

「ではあれは——あの人は何なのですか。」

「あれですか。あれは僕の友人ですよ。本職は医者で、傍南画を描く男ですが。」

「西郷隆盛ではないのですか。」

本間さんは真面目な声でこう云って、それから急に顔を赤らめた。今まで自分のつとめていた滑稽な役まわりが、この時忽然として新しい光に、照される事になったからである。

「もし気に障ったら、勘忍し給え。僕は君と話している中に、あんまり君が青年らしい正直な考を持っていたから、ちよいと悪戯をする気になったのです。しかしした事は悪戯でも、云った事は冗談ではない。——僕はこう云う人間です。」

老紳士はポケットをさぐって、一枚の名刺を本間さんの前へ出して見せた。名刺には肩書きも何も、刷ってはない。が、本間さんはそれを見て、始めて、この老紳士の顔をどこ

で見たか、やつと思ひ出す事が出来たのである。——老紳士は本間さんの顔を眺めながら、満足そうに微笑した。

「先生とは實際夢にも思ひませんでした。私こそいろいろ失礼な事を申し上げて、恐縮です。」

「いやさっきの城山戦死説などは、なかなか傑作だった。君の卒業論文もああ云う調子なら面白いものが出来るでしょう。僕の方の大学にも、今年は一人維新史を専攻した学生がいる。——まあそんな事より、大に一つ飲み給え。」

曇^{みぞれ}まじりの雨も、小止^{こや}みになったと見えて、もう窓に音がしなくなった。女連れの客が立った後には、硝子の花瓶にさした菜^なの花ばかりが、冴え返る食堂車の中にかすかな匂を漂わせている。本間さんは白葡萄酒の杯を勢いよく飲み干すと、色の出た頬をおさえながら、突然、

「先生はスケプティックですね。」と云った。

老紳士は鼻眼鏡の後^{うしろ}から、眼でちよいと頷いた。あの始終何かに微笑を送っているような朗然とした眼で頷いたのである。

「僕はピルロンの弟子で沢山だ。我々は何も知らない、いやそう云う我々自身の事さえも

知らない。まして西郷隆盛の生死をやです。だから、僕は歴史を書くにしても、嘘のない歴史などを書くとは思わない。ただいかにもありそうな、美しい歴史さえ書ければ、それで満足する。僕は若い時に、小説家になろうと思った事があった。なったらやっぱり、そう云う小説を書いていたでしょう。あるいはその方が今よりよかったかも知れない。とにかく僕はスケプティックで沢山だ。君はそう思わないですか。」

(大正六年十二月十五日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年10月28日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第11刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1998年12月23日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

西郷隆盛

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>